電子情報工学科

消滅の危機に瀕した「イテリメン語」の調査・分析に取り組むことで言語の多様性の実態に迫りたい。

【研究テーマ】イテリメン語の文法研究

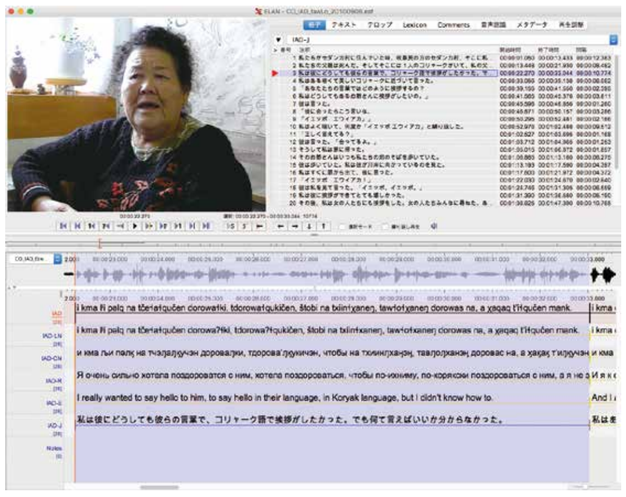
【キーワード】危機言語

研究

わずか数人となった話者が居住するカムチャツカでフィールドワークを行い、録音・録画データを収集。



イテリメン語の話者を訪問してインタビューを実施



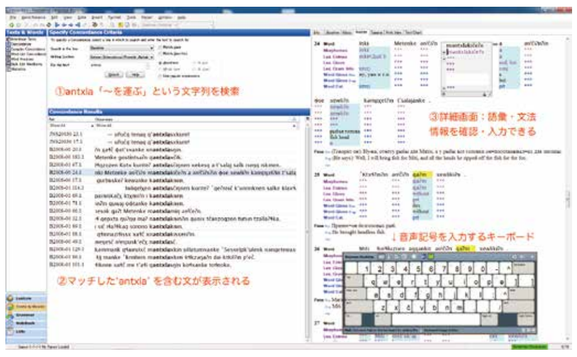
「ELAN」を使用した動画の分析

「イテリメン語」のテキストコーパスを構築

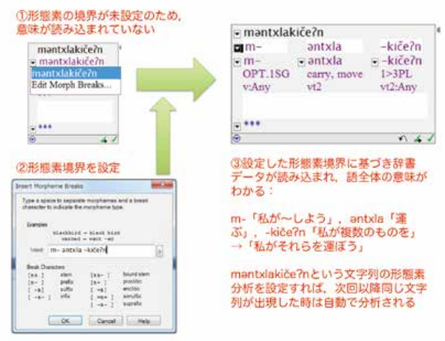
「イテリメン語」(チュクチ・カムチャツカ諸語)は、ロシアのカムチャツカ半島で話されている少数言語。現在の話者は数人で、消滅の危機に瀕した言語です。私の研究目的は、このイテリメン語がどんな言語であるかを明らかにし、周辺諸言語(アイヌ語、コリャーク語など)との関係性や北東ユーラシアの言語状況を解明すること。言語の多様性の実態に迫りたいと考えています。そのために、話者の居住地でフィールドワーク(現地調査)を実施、生まれた土地、居住歴、両親の言語についてインタビューを行い、言語データを収集。初めに語彙(単語)を集め、その言語がどのような音で成り立っているか(音素)を特定します。音素がある程度解明されたら、さまざまな例文を集めて名詞や動詞の変化の仕方を観察。並行して会話の録音・録画データを収集し、持ち帰って文字起こしを行います。そうしてテキスト化したものに訳や文法情報(主語・目的語の人称、過去・未来などの時制ほか)を加えてテキストコーパスを構築し、調べたい文法情報を検索、整理・分析して研究を進めます。

多様な言語の中で、法則性を見つけ出すのが面白さ

言語の在り方はとても多様で、言語ごとに違います。例えば、ある語の意味や働きが不明な時、その語がどういう時に使われているかをデータの中から探し、法則性を見つけ出すのはとても面白いです。まるで誰も解けないパズルに挑戦して、自分だけ解くことができたような気持ちになります。ただ、少数言語の場合、言語データを自分で現地に取りに行き、研究に使えるデータに仕上げること自体が大変です。少数言語の文字起こしはまだ自動化ができないため、人力で行っています。でも、苦労があるからこそ、新発見の喜びはひとしおです。進歩が目覚ましい生成AIを研究に役立てられないかも模索しています。



「FLEx」で動詞の出現例をマッチ

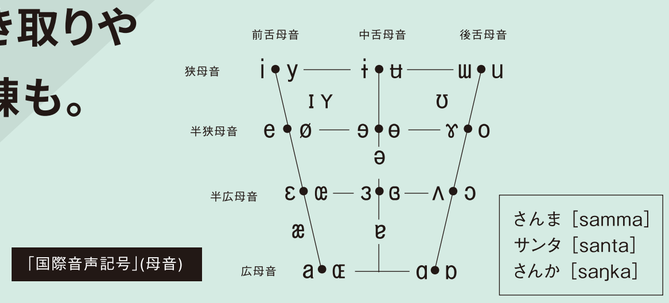


「FLEx」を使用して動詞を分析

授業

音声学セミナー

音声学の基礎知識を学んで音声の聞き取りや発音の訓練も。



「国際音声記号」(母音)

さんま［samma］
サンタ［santa］
さんか［saŋka］

「さんま」「サンタ」「さんか」。それぞれの「ん」は違う発音!?

英語やその他の外国語を勉強する時、[æ][ə][ʃ][ɔ]などの音声記号を見たことはありませんか？こうした記号(IPA＝国際音声字母)をマスターすると、理論上は世界中すべての言語の発音ができます。それには訓練が必要ですが、少なくとも、どんな言語の音声でもどのように口を動かせば正しく発音できるのか習得できます。そもそも私たち日本語母語話者も、日本語の音がどう発音されているかよく分かっていません。例えば、「ん」という音は同じ仮名で表されますが、実際はさまざまな音に変化。「さんま」「サンタ」「さんか」のそれぞれの「ん」がどこで発音されているか、口の中で舌の状態がどうなっているか、確かめてみてください。人間の音声がどこでどのように発せられるのか(＝調音音声学)を学び、音声を聞いてそれぞれの音の名称が分かり、IPAで書き取れることが授業の目標です。



工学部電子情報工学科
教授

小野（おの） 智香子（ちかこ）

「音声学セミナー」の授業では、音声学の基礎知識を解説し、ひとつひとつの音声について口の動かし方、息の出し方、舌の位置などを確かめながら、学生たちに実際に声を出してもらいます。電子情報工学科で学べる音響工学や音声認識、AIなどの分野にも、言語学の知識は役立つはず。「言語」に興味を持ってほしいと思っています。

〈専門分野〉
言語学
(フィールド言語学・記述言語学)

〈主な担当科目〉
言語学、アイヌの言語と文化、一般言語学セミナー、音声学セミナー